

婚約者に

破滅はめつする

悪役女帝あくやくじょていの
転生押ししました。

Hametsu suru akuyaku jotei

"oshi" no konyakusha ni

tensei shimashita.

vol. 2

著

鈴木竜一
Ryuichi Suzuki

illustration よだれ

ヘレナ

ロミーナたち三姉妹の母親。厳格な振る舞いの裏に、何かを秘めている。

エクリア

冷静沈着なロミーナの長姉。高い魔法の才を持つ。

カテリノ

活力溢れるロミーナの次姉。姉と共に学園に通っている。

パウリーネ

ロミーナの護衛を務める近衛騎士。王都の騎士団に所属しており、モリスとは同期。

モリス

王都の騎士団に所属する騎士。真面目でクール、その実力も一級品。

アズベル

本作の主人公。前世で好きだったゲームの世界に、辺境貴族として転生した。婚約者のロミーナが未来で破滅すると知り、運命を変えるために奔走する。ロミーナは前世での『推し』。

カルロ

貧民街に暮らす、正義感の強い少年。実はゲーム世界における本来の主人公。

イルデガルド

アズベルの屋敷の近くに住む謎多き魔女。魔法の腕は確かだが、気まぐれで掴みどころがない。大好物はお酒。

ロミーナ

アズベルの婚約者。ゲームでは氷魔法を操る冷酷な悪役女帝として知られていた。ただ現時点では、心優しく穏やかな少女。

第一章 推しキャラの過ぎゆく日々

【ブレイブ・クエスト】——俺が人生でもっともハマったオンラインゲームのタイトルだ。

剣と魔法のファンタジー世界を舞台に、世界を救う運命を背負った主人公カルロと魅力的なヒロインたちが織り成す壮大なストーリー……気がつくと、時間を忘れてどっぷりこの世界に浸っていたな。

開発は日本のメーカーだが、ユーザーは世界中に数えきれないほど存在しており、その数は数億人レベルとも言われている。

そんな大人気作品である【ブレイブ・クエスト】だが、人気の理由のひとつにあげられるのが可愛いヒロインたち——なのだが、俺はどちらかというと敵のボスキャラの方が好きで、ずっとその中の一人、ロミーナ・ペンバートンが推しだった。

メインキャラではないため、残念ながらフィギュアなどのグッズ化はされていないが、それでも俺は【氷結女帝】と呼ばれる彼女が好きだった。

しかし、ロミーナはストーリーの都合上、どう足掻いても主人公カルロたちによって倒される運命にある。

できれば改心して幸せに暮らせるエンディングがあればいいのだが、現段階でそのような分岐ルートは存在しておらず、もはや開発スタッフでさえ、彼女が存在を忘れているのではないかとさえ思っていた。

そんなある時、俺はふと気づく。

いつの間にか、【ブレイブ・クエスト】の世界に転生し、しかも推しキャラであるロミーナの婚約者——アズベル・ウイドマークに転生していたのだ。

両親から婚約者として紹介された幼少期の彼女は、ゲームの世界の中で数えきれないほどの悪事を働き、人々を困らせる諸悪の根源みたいな存在とはとても思えないほど、純粹無垢で優しい少女であった。

なぜ、彼女はゲームであのような変貌を遂げてしまったのか。

疑問が生まれると同時に、俺の脳裏に、これまで叶えようとしてもできなかったある夢を実現する大きなチャンスが巡ってきたという思考が浮かび上がった。

俺はずっと……ロミーナを助けたいと思っていた。

確かに、彼女は【ブレイブ・クエスト】の中では許されてはならないほどの大悪党。

けど、きつと生まれたその瞬間から悪党だったわけじゃないはず。

何か理由があつて彼女は悪事に手を染めたのだ。

そう確信した俺は、ロミーナに迫り来る闇堕ちフラグを徹底的に潰していくと決意する。

闇堕ち回避が現実のものとなった時、きつとロミーナは俺が思い描いていたような幸せな未来を掴み取れるはず——なのだが、道のりは想定していたよりもずっと険しく、そして非常に厄介だった。

まず分かったのは、彼女はどうかやら家庭環境に問題を抱えているということ。

さらに人間関係から来る闇堕ちだけならいざ知らず、よく分からない別の悪党までもがロミーナを狙ってくる始末。

彼女が持つ、強大な氷魔法の力を悪用しようとしてもいうのだろうか。

まだロミーナ自身がその力をうまく扱えていないのに、まったくのよそ者が手を出してしまったらどうなってしまうことやら……そういった恐怖心はあるものの、このまま放っておいていいわけがない。

俺は大切な推しを守るため、彼女のために生きようと決意を胸に刻み込んだ。

ゲーム内では数枚の立ち絵しかなく、声優もない地味なボスキャラだけど、間違いなく彼女がいてくれたから、俺はゲームを楽しめていたし、何よりストレスなく現実世界で会社勤めができるようになった。

ロミーナ・ペンバートンは俺を助けてくれた。

彼女にその気がなかったとしても、俺は間違いなくロミーナに生きる希望をもらったんだ。だから……今度は俺が彼女を救う番だ。

ロミーナが笑顔で暮らせる世界にするため、力を求めた——が、俺が神から託されたのは生産魔法と呼ばれるもの。

これではモンスター一匹まともに倒せない。

困惑したが、すぐに新しい武器を魔法で生産するという発想を思いつき、有事の際には自分の力だけになっても必ずロミーナを守ると改めて誓う。

この前は彼女を狙う強い魔法使いも追いつ返し、これでしばらくは大丈夫だろう。

さて、そんな悪役女帝と俺は今——

「見て、アズベル！　こんなに大きなお芋があつたよ！」

「でかした、ロミーナ！」

芋掘りに汗を流していた。

ウイドマーク家の領地——パルザン地方。

そこにあるガナス村で、今日も俺とロミーナは村人たちに混ざって野菜の収穫を手伝っていた。

少し離れた場所からは、護衛騎士を務めるパウリーネさんとモリスさんが俺たちの奮闘ぶりを見守っており、さらにその近くには木に背を預けて寝息を立てているイルデさんの姿が。

彼女はロミーナの師匠で、今日もこのあと彼女と特訓する予定だ。お酒好きで少々だらしない面があるものの、魔法使いとしての腕と指導力は本物で、少しずつではあるが、ロミーナは氷魔法の制御ができるようになってきている。

イルデさんへの弟子入りは、ロミーナのメンタルにも大きな好影響をもたらした。

出会った当初はとても控えめで、自信がなさそうだった。というより、自分の魔力の暴走によって誰かを傷つけてしまわないかと怯えていたって表現の方が正しいか。

彼女が持つ強大な氷属性の魔力……こいつを完璧に使いこなすことができれば、きっと周りの彼女を見る目も変わるはず。

それに、王立学園への体験入学も近づいているからな。

あそこで友人関係をきちんと構築できるのか——原作のように暴走し、「氷結女帝」なんて呼ばれないようにするためには、学園生活が鍵を握っていると言っているいいんじゃないかな。

そうこうしている間に朝の農作業が終わり、片づけが始まった。

すると、ひとりの若い村人が俺のもとへとやってくる。

「アズベル様、実は先ほどの作業で鍬が壊れてしまいました……」

「了解。任せてよ」

俺は持ち手が折れてしまった鍬を手にすると、生産魔法を発動させる。

同時に、目の前の空間に割れ目が発生した。

これこそが、生産魔法にとつて重要となる魔法庫。

ここに素材を入れることで、新たなアイテムを生み出したり、壊れたものを修復したりできるのだ。

何が作れるのか。

どれほどの破損状態から直せるのか。

俺は常日頃から、この生産魔法の可能性を模索もさくしていた。
すべては……ロミーナに迫りくる闇堕ちフラグをぶっ壊すため。

なんて、大それたことを言ってみても、一体何をどうすれば彼女を破滅へと導く闇堕ちフラグを
消滅させられるのか——これがまだ明確に分からないんだよな。

俺の最推しであり、今は婚約者のロミーナだが、原作ゲームでの彼女の立ち位置は主人公と敵対
するボスキャラだ。

人々を苦しめる氷結女帝として立ちはだかるが、結局は主人公とヒロインたちによって倒されて
しまう。

苦しめられた人々は氷結女帝の死に歓喜の声をあげる……けど、今となっては思い出したくない
シーンだな。本当は心優しくて、誰も傷つけたくないから氷魔法を制御しようとひたむきに努力す
る彼女の姿を見ていると、絶対にゲームのような結末を迎えさせちゃダメだって思える。

——なんて、ロミーナへの思いを再確認している間に、修繕完了。

魔法庫から鍬を取り出すと、元通りどころか新品の頃以上に頑丈がんじょうになって生まれ変わった。

「凄い！ さすがはアズベル様だ！」

「大袈裟おおげさだなあ」



「何をおっしゃります！ その生産魔法のおかげで、私たちは大助かりなんですよ！」
「そうですよ！」

「アズベル様のおかげでワシらは今日も平穩に楽しく暮らせておるんじや」
次々と村の人たちからお礼を言われる。

悪い気はしないんだけど、俺としてはまだまだ生産魔法を發展させなくちゃいけないと思っているので、まだ手放しに喜べる状況じゃなかった。

……でもまあ、喜んでもらえるのはやっぱりいいよな。

村人たちからのお礼ラッシュが終わると、背後から女性の声がした。

「彼女、日に日に表情がよくなっていくね」

収穫した野菜を籠^{かご}詰めしていると、イルデさんがそう声をかけてきた。

「君との関係も良好なようだし、魔法の特訓についてはもう少しレベルアップしてもいいかもね」

「レ、レベルアップですか？」

「そうさ」

な、なんだ？

一体何をしようっていうんだ？

まさか、危険なことじゃないよな？

「ど、どんな特訓内容なんですか？」

「それほど難しいことじゃないさ。これまでは制御を目的にしてきたが、これからはそれを外へ押し出す方向に強めよう」と――

「え、ええっと……」

ダメだ…何を言っているのかサッパリ分からないぞ。

困惑していると、それを察したイルデさんは「ふむ」とだけ言って少し考える。それから、ニコツと微笑みを浮かべた。

「少々表現が難しかったようだね。分かりやすく言うと、今後は氷魔法を強度が高いまま攻撃に転用できるようにするって話さ」

「こ、攻撃って……」

つまり、ロミーナが戦いに参加するってことか。

……それはダメだ。

いくらイルデさんからの提案であっても受け入れられない。

――だが、続いてイルデさんが口にしたのは意外な言葉であった。

「これはロミーナ自身のためだよ。あの子はきつとこの先……自分が望まなくても戦いの渦^{うず}に巻き込まれていくだろうからね」

「ロ、ロミーナが？」

最初はそんなバカなっと思った――けど、原作ゲームのシナリオを思い出してみたら、額^{うなず}けるん

だよな。人々を傷つける「氷結女帝」のロミーナだが、彼女は決して自ら望み、その立場となったわけじゃないのだ。

メインキャラではないからなのか、ロミーナの過去については設定がぼんやりしており、悪の道歩むこととなった具体的な経緯については触れられていない。

しかし、婚約者に転生した俺は、それにふたりの姉がかかわっているんじゃないかと踏んでいる。もつとも、そう断言できる根拠があるってわけじゃなくて、あのふたりのロミーナに対する態度が冷たすぎるんだよな。

まあ、ロミーナの魔力暴走の影響が悪い方に働いているという事情も絡んでいるのだろうけど。その辺は俺が積極的にかかわっていくべきかどうか……難しいところだな。

「うーむ……どうしたものか」

「何をそんなに悩んでいるの？」

「うおっ!？」

考えすぎていてロミーナの接近にまったく気づかなかったよ。

「ご、ごめんささい。そんなにビックリするなんて思わなくて」

「いや、こつちこそごめん。実は……もらった野菜をどう調理してもらおうか迷っていたんだ」

「確かに……それは重大な問題ね」

こちらの誤魔化しに乗ってくれたか。

……とにかく、いろいろと考えたが、原作のロミーナとここにいるロミーナには決定的な違いがある。

それは——この俺、アズベル・ウイドマークがいるということだ。

本来のアズベル・ウイドマークは婚約者であるロミーナのために何もしなかったロクデナシ。彼女が主人公であるカルロたちに倒されると一緒にストリーから消滅するただのモブ。

でも、この世界のアズベルは違う。

ロミーナを救うため、与えられた生産魔法の力を使いながら破滅フラグを叩き折る。

そして、必ずロミーナとの明るい未来を勝ち取るんだ。

◇◇◇

その日の夜。

ガナス村の人たちから、収穫を手伝ってくれたお礼にと渡された新鮮な野菜を使用したディナーをいただき、その後は談笑タイムへ。

「そういえば、魔法の特訓はどうだった？」

実はずっと気がかりだったんだよな。

俺は最近、モリスさんが組んだ基礎体力の向上メニューに取り組んでおり、その関係で魔法の特

訓には付き合えていなかったのだ。

イルデさんはこれまでと違う特訓をするって言っていたから心配していたけど……あの充実した表情を見る限り、杞憂^{きゆう}に終わったようだ。

「いつもより大変だったけど、凄くやりがいがあったわ！」

瞳を輝かせながら、ロミーナはそう語る。

「どんな特訓だったの？」

「今までは必死に魔力を抑え込もうとしていたんだけど、今度はうまく放出できるようにコントロールをしていたの」

生き生きと特訓内容について話してくれるロミーナだけど……制御して放出って前からある程度できていたような気がする。

それについて聞いてみると、テンション高めのまま説明してくれた。

「以前はもちろんコントロールできるって確信を持ちながらやっていったんだけど、イルデ師匠の指導でより正確さが増したっていうか……よりうまく制御できるようになったの」

言葉の端々から感じられる自信。

出会った頃のロミーナには見られなかった姿だ。

さらに彼女は続ける。

「私ね、アズベル……新しい目標ができたの」

「目標？ どんな？」

「氷魔法の力を完璧に使いこなして、いろんな人を助きたい。イルデ師匠もきつとできるって応援してくれたのよ」

これ以上ないくらい眩い笑顔を添えて自身の夢を語るロミーナ。

一方、俺はというと……少し戸惑っていた。

ハッキリ言って、ロミーナがここまで「氷魔法を制御する」ではなく、「氷魔法を有効活用する」って発想に前向きだとは思わなかったからだ。

何せ、彼女はこの力のせいで苦しい思いをしてきた。

姉妹仲が悪いのだって、氷魔法をうまく制御できないのが理由になっているだろうし、ロミーナ自身もそれを気にしている素振り^{そぶり}があった。

——でも、これはいい傾向だぞ。

世界を氷漬けにする勢いだった原作とは違い、しっかりと自分の力と向き合って正しい方向へ力を使おうとしている。

きっと、これが破滅フラグ消滅へ向けた大きな一歩となるはずだ。

あとは俺がそれをバックアップしていけばいい。

実際に彼女を導いてくれるのはイルデさんだけど、俺だってロミーナを支えるためにやれることはどんどんやっていこう。

「素晴らしい目標だと思うよ、ロミーナ。俺も君がそれを達成できるように応援するから」

「ありがとう、アズベル」

彼女の手を取ってそう告げた次の瞬間、突然パチパチと拍手する音が。

……しまった。

ふたりの世界に浸ってすっかり忘れていたけど、この場には護衛騎士であるパウリーネさんとモリスさんもいたのだ。

「実に素晴らしいお言葉です、アズベル様」

モリスさんに至っては感動しすぎて泣いている。

そんなに涙脆かったのか。

彼の横では騎士団の同期であるパウリーネさんが苦笑いを浮かべながら「やれやれ、いつものが始まったわね」と言っただけ息をついている。

この状況、パウリーネさんにとっては慣れっこらしい。

「最近は少しマシになったと思ったけど、やっぱり涙脆さは変わっていないわね」

「う、うるさいぞ、パウリーネ」

「そんなに普段から泣いているんですか？」

俺が尋ねると「待っていました」と言わんばかりにイタズラっ子みたいな笑みを浮かべたパウリーネさん。

この人、たまにお茶目な一面見せるよね。

「初めて勲章くんしやうを授与された時とか、本当にひどかったですよ。アズベル様に義手をいただいた時も、感動のあまり陰で泣いていたくらいですし」

「み、見ていたのか!？」

モリスさん自身も知らなかったのか。

とりあえず、「コホン」とわざとらしい咳払いせきばらいを挟んでから、モリスさんは誤魔化すように話題を変える。

「五日後には体験入学も控えておりますので、ぜひ学園生活の参考にしてくださいねばと」

「体験入学……」

ロミーナの声のトーンが少し暗くなった。

この変化にパウリーネさんとモリスさんも気づいたようだが、どう反応してよいか困っている様子。

しょうがないな、ふたりとも。

ここは俺に任せてもらおうじゃないか。

「大丈夫だよ、ロミーナ。学園には俺も一緒に毎日通うんだ。何も怖いことなんてないさ」

「ア、アズベル……そうだよね。アズベルと一緒にならきつと平気よね」

このひとりで、ロミーナの気持ちは前向きなものへと変化。護衛騎士ふたりもホッと胸をなで下

ろしていた。

ただ、大事なのをこれを実行に移すという点。

ロミーナが充実した学園生活を送れるようにするために、俺がしっかりしないと。そう決意を胸に秘めた——その時だった。

「うむ。なかなか見どころのある宣言だったよ」

この部屋にいたのは俺とロミーナ、そしてパウリーネさんとモリスさんの四人だけだったはずなのに、なぜか三人目の女性の声が室内に響き渡る。

……まあ、よく知っている人物だったから、特に驚きはしなかったけど。

「イ、イルデさん？」

「やあ、夜分遅くに悪いね」

いつの間にか窓が開いており、その縁に腰かけているイルデさん。

俺やロミーナは当然ながら、パウリーネさんとモリスさんすら気配をまったく感じ取れていなかった。まさに神出鬼没……ゲームで強キャラ扱いされている理由がよく分かるな。

「どうしたんですか、こんな夜に」

「いや何、お裾分けでいただいた野菜がとてもおいしかったからお礼を言いに来たというのと……君たちがこれから参加する予定の行事にて、少々厄介な事態が発生しそうだったから忠告をしに来たのさ」

「厄介な事態？」

その場にいた四人全員が一斉に顔を見合わせる。

もしかして、体験入学のことを指しているのだろうか。

俺は真意を確認するため、質問を試してみた。

「五日後に迫った体験入学で何か起きるんですか？」

「可能性は高い」

珍しく真面目な口ぶりだ。

先日、俺たちを襲ってきた魔法使いの件もある。

だったら……対策はひとつしかないな。

「イルデさんほどの魔法使いが厄介な事態というくらいですから、そこに絡んでくる者は相当な腕前なのでしょう」

「私はそう見ているよ」

「なら、護衛の新戦力として体験入学に同行してくれませんか？」

「なんだって……？」

まさか俺からそんな提案がなされるとは想定していなかったらしく、イルデさんは目を大きく見開いて呆然としている。

しかし、彼女がこんなアクションを取るのって初めてじゃない？

そんなビックリするようなお願いだったかな？

すると、ここでモリスさんから思わぬ援護射撃が。

「私からもお願いできるだろうか」

彼もまた、イルデさんの同行を希望したのだ。

正直、モリスさんの騎士としてのプライドを傷つけてしまうお願いだったかもしれないって思ったから、これは意外だった。

そんな俺の心情を察してか、モリスさんは自らの考えを述べた。

「もし相手が魔法使いだとすれば、専門家であるあなたの助言を受けたい。以前の戦いでも、あなたはおふたりを守ってくださったと聞いている。何より、アズベル様自身がそう求められたということは、それほど信用に値する人間だと認めている何よりの証。であれば、私としてもぜひ協力をお願いしたい」

俺が信頼している人だから信頼できる。

モリスさんが導き出した答えはそれだった。

この真つ直ぐな意見には、さすがのイルデさんも動揺していた。

「しかし、いいのかい？ 魔法兵团にも所属していないこの私が、君と一緒に主の護衛につくのだよ？ 騎士としてのプライドが傷つくんじゃないのかい？」

「私のプライドよりアズベル様とロミーナ様の命の方が大事だ」

それは決定的なひと言だった。

何よりも俺やロミーナを守りたい——そう語った彼の顔を見つめていたイルデさんは、「ふっ」と小さく笑ってから姿勢を正す。

「随分と期待を背負ってしまったようだけど……分かった。私としても大事な弟子とその婚約者に何かあつてはたまらないからね。全力で守らせてもらおう」

「ああ、よろしく頼む」

「私からも協力を感謝するぞ、イルデ」

モリスさんにパウリーネさんも加わって、三人はそれぞれ握手を交わす。

これで俺とロミーナの厳重な警護体制が整ったな。

……正直、ちょっと前から非公式で三人がかりだった気がしなくてもないけど、公式に認められたって考えたら大きいな。

明日になれば、体験入学まで残り四日。

それまで、俺は俺で可能な限り準備をする。

イルデさんが言うように、学園で何かが起きるとすれば……それはきっと、ロミーナの破滅フラグとかかわりの深く、原作ゲームには登場しない、本当の意味での隠しイベントになるな。

そいつをなんとかして破壊できれば、ロミーナとの幸せな未来に前進できるはず。

よおし、やってやるぞ！

第二章 イルデからの課題

翌日。

俺は早朝に目を覚ますと、軽くストレッチをしてから朝の自主鍛錬へと挑む。

とはいえ、これはモリスさんにも秘密にしているもので、屋敷の敷地内からは出ず、ひっそりと模造剣の素振りや基礎体力づくりを行う。

本来、俺が武器として磨かなくてはいけないのは生産魔法だ。実際、自分の生み出した武器で戦い、勝利をおさめたこともある。

——だが、あくまでも武器を生みだせるだけであり、それを使って戦うのは他ならない俺自身だ。どんなに優れた武器であっても、使い手の実力がポンコツでは宝の持ち腐れになってしまう。

もちろん、モリスさんやパウリーネさんといった一流の騎士たちに使ってもらった方がいいんだろうけど……もしかしたら、俺とロミーナだけが取り残された状況で戦わなくてはいけない時があるかもしれない。

そうなった時にしっかりと対処するため、俺はモリスさんの特訓を受けている。

けど、それだけではまだ足りない気がしたので、こうやって自主鍛錬をしているというわけだ。

「さて、次は……」

「朝から精が出るじゃないか」

素振りを終えたところで声をかけられ、ビクツと体が強張る。

相手は――

「イ、イルデさん？」

またしても静かに屋敷内へと侵入しているイルデさんだった。

「秘密の特訓に励んでいるとは感心するが、やりすぎはよくないぞ？ 君はまだ体が成長しきっていない子どもなんだ。あまり負担をかけすぎるとかえって肉体に悪影響を及ぼしかねないよ」

「うっ……」

そういう話って、聞いたことあるな。

「体を動かしていないと不安かい？」

「そ、その通りです」

ピタリと当てられた。

心を読む魔法でも使ったのかってくらい正確だったぞ？

なんとなく照れ臭くなった俺は、昨日のモリスさんのように話題を変えてみる。

「今度はまたどうしてこんな早朝に？」

「前から、君とは一度じっくり話しておきたいと思っていてね」

「お、俺と、ですか？」

なんだかいつもと少し様子が違うように映るイルデさん。

彼女は静かにこちらへと近づくのだが——距離が縮まるほどに魔力が高まっているのを感じた。まるで……臨戦態勢じゃないか。

「どうだい？ 私の魔力は？」

「す、凄まじいです……」

「だろう？ ——けど、ロミーナの魔力はこんなものじゃない」

「ええっ!？」

驚きの告白だった。

なぜなら、魔法を制御できていなかった頃のロミーナでさえ、今のイルデさんの魔力に比べると遥かに劣る。

だけど、イルデさん自身は今の自分よりロミーナの方が上だと言うのだ。

「実を言うと、私も昨日の特訓で初めてそれが分かってね。彼女の潜在能力は計り知れない……もしかしたら、王国史上最強の魔法使いとして後世に名を残す存在になるかもしれない」

「ロ、ロミーナが……」

とんでもない話になってきたな。

「相当な実力者というのは分かっていたが……こちらの想像を凌駕してくるとはね」

苦笑いを浮かべながら、イルデさんは語る。

その時、俺には何となく彼女が俺に伝えようとしている内容が読めた気がした。

「ロミーナは……その魔力を完全に制御できると思いますか？」

「難しいだろうね——彼女ひとりの力では」

最後につけ足されたその言葉で、俺は確信する。

「制御するのに補助となる魔道具が必要というわけですね」

「その通りだ」

やはりそうだったか。

「俺の生産魔法でも、それを作り出すことは可能でしょうか？」

「今後の鍛錬次第だね」

「ならやりますよ。ロミーナのために」

「君ならそう言うと思ったよ」

イルデさん……最初から俺がそう答えると分かっていたな？

でも、それなら気になることがある。

「どうして俺だけにこの話を？ 昨夜してもよかったのでは？」

「なるべくロミーナの真の力について、知っている者の数は少ない方がいい。もちろん、モリスやパウリーネを疑っているわけじゃない——が、中には相手から強制的に情報を引き出す魔法を使う

外道^{げいどう}もいるからね」

「そ、そんな奴が……」

「まあ、その魔法は今や禁忌^{きんぎ}として簡単には扱えないようになってはいるがね」

「そ、それなら……」

「ただ、それを自在に扱える者が、学園に潜んでいる可能性もある」

「どっちなんですか!？」

結局、安全なのかそうじゃないのか……読めなくなってきたじゃないか。

「脅^{おど}かすつもりではなかったのだけどねえ」

「本当ですかあ？」

「もちろんさ。ただ、これだけは言っておく」

急に真面目な声になるイルデさん。

緩急^{かんきゅう}がえぐいなあ。

だが、ここでもたらされた情報こそが本命であり、今までのやりとりは壮大な前振りであつたと発覚する。

「前にこの屋敷を襲ってきた奴について調べている最中に、ある魔法使いをふと思い出してね」

「ある魔法使い？」

「敵になるか味方になるか……まあ、あの性格を考慮したら、こちら側に手を貸す公算は高いね」

「知り合いなんですか？」

「……まあね」

おっと？

なんか微妙な反応だな。

因縁のある人だったりするのかな？

そんなことをふと考えた時、脳裏にあるキャラクター名が思い浮かぶ。

「ミルクス・エルディン……」

無意識のうちに、俺はキャラクターの名前を口走る。直後、イルデさんが物凄い勢いでこちらへと視線を向けた。

ミルクス・エルディンは【ブレイブ・クエスト】のメインヒロインの一人だ。史上最年少の十一歳で学園を首席で卒業し、若くして魔法研究者となった天才魔法使いだった。おそらくこのタイミングでは十三歳のはず。

「君がなぜ彼女の名前を知っている……?」

目を大きく見開き、真剣な眼差しで俺を見つめるイルデさん。

……迂闊^{うかつ}だった。

俺はこの世界の流れ——つまり、原作ゲームのストーリーを知っている。

当然、メインキャラであるヒロインたちは初期ステータスやレベルアップすることで覚えるさま

さまざまなスキルも把握していた。

——が、それはあくまでもゲームの中での話。

現実はまだ会ったこともない女性のデータをあれこれ知っている男なんて……めちゃくちゃキモいだけだ。

「い、いえ、その、たまたまですよ」

「たまたま？」

「じ、実は、この前、父上が学園のさまざまな情報が記された小冊子を持ってきてくれたんですけど、そこにミルクス・エルディンさんの名前があったんですよ」

——嘘だ。

確かに父上から小冊子をもらったが、あれには学園のことではなく、教職員やゼミの内容などが書かれていた。

そこにミルクス・エルディンの名前が……あつたかどうか定かではない。

ただ、ここはどうしても「いる」という前提で話を進めるべきだろう。

腑に落ちていない様子のイルデさんだが、これ以上ややこしい事態が起きる前にさっさと先へ進もうと、彼女の脳が情報処理を完璧に終えるよりも先に次の話題へと勝手に移ってしまう。

「イルデさんはどうなんですか？ もし、ミルクス・エルディンが敵となってロミーナを襲ってきたりしたら——」

「何も考えずにとつと片付けるよ」

話の途中でバツサリと斬り捨てられた気分になる言葉だ。

でも、声の感じからして真面目モードになって答えているのはよく分かった。なので、あれが偽りのない、イルデさんの飾らない本音なのだろうな。

……ただ、かなりドライな対応だから、もしかしてあんまり仲がよろしくない？

「彼女とは友人というわけではないんですか？」

「友人、か。私と彼女の関係がそれに当てはまるかどうかは少々疑問符はつくけれど……少なくとも敵対関係にないことは確かだ」

なんとも歯切れの悪い答え方だな。

そこはスパッと敵か味方の二択で答えてもらいたかったのだが……とりあえず、複雑な事情が絡んでいるというのは理解できた。

だとすると、次の質問でだいぶ答えが絞られそうだな。

「それでも、なんだか嫌な気がしますせんか？」

「言いたいことは分かる——が、君がそうであるように、私はロミーナ・ペンバートンを守りたいと心から願っている。それを邪魔し、あの子に危害を加えようというなら、たとえ知り合いであっても容赦なく最大級の魔法をぶつけてやるさ」

な、なんて頼もしい言葉だ。

俺とは迫力がまるで違うな。

こっちはこっちで剣の腕を磨き、ロミーナを救うために奔走^{ほんそう}しているが、やはり知識不足は否めない。

しかし、イルデさんって本当に掴みどころのない人だ。

振り回されるこちらの身にもなってもらいたいよ、まったく。

……いつそ体験入学を辞退するって手もあるんじゃないか？

ロミーナの命には変えられないからな。

「ちなみにだが、体験入学には参加しておくべきだろうな」

「っ！ ど、どうして!？」

「というか、こっちの心を読んでない!？」

「目的が学園だからさ」

「へっ?」

どういう意味なんだ、と首を傾げる。

イルデさんほどの実力者が危険視するほどの人物が潜んでいるなら、近寄らない方がいいんじゃないのか？

だが、ここにはある秘密があった。

「学園には生徒以外にも、研究職に就く多くの優秀な魔法使いが在籍している。そのことは知って

いるだろう?」

「え、ええ……」

「いざとなれば、彼らが力を貸してくれる。彼らの力を借りて……危険な芽^めは大きくなる前に刈^かり取ってしまおうじゃないか」

「……分かりました」

イルデさんの言葉に、俺は緊張しながらも小さく頷く。

しかしこれまでの話を聞いて、俺には思うことがあった。

学園へは体験入学とのことだが、実際に授業や演習を受けたりするらしいので、わりと様々なイベントが行われる。つまり、予想外のことも起きやすくなるはず。

だったらなおのこと、この件はモリスさんやパウリーネさんにも伝えなくちゃいけないと思った。

「イルデさん……やっぱ、モリスさんとパウリーネさんにも協力を仰ぎましょう」

そう提案すると、イルデさんは真面目な顔つきでこちらを見つめる。無言だけど、その目は「続けてくれ」と語ってるように感じた。

「さっき言っていたイルデさんの懸念はもつともです。でも、あのふたりがいてくれたら、ロミーナを守る可能性もグッと上がりますよ」

「それはそうだが……」

「俺もあの子を守るために全力を尽くします。そして、ロミーナを狙う奴がいたら、みんなで力を

合わせて倒しましょう」

俺の呼びかけに対して、イルデさんはしばらく考え込んでいた。
しばらくしてからゆっくりと話し始める。

「君の意見を採用しよう」

「ほ、本当ですか!？」

イルデさんは俺からの提案を呑んでくれた。

「私としても、モリスやパウリーネの実力や人柄を疑っているわけじゃないんだよ」
「ならば、ともに戦わせてもらおう」

「おふたりを守りたいという気持ちならば、私たちも負けていませんからね」
俺とイルデさんの会話に入ってきた、ふたつの男女の声。

それはまさに、今話題にあがっていたモリスさんとパウリーネさんであった。

「ふ、ふたりとも、いつから……」

「割と序盤から聞いていましたよ」

「ほお……この私にまったく気配を悟らせなかったとは……」

「実力は証明できたと云って問題なさそうですね」

パウリーネさんがニヤリと笑う。

それを見たイルデさんもつられて「ふふっ」と小さく笑った。

「すまないな。私は君たちを過小評価していたようだ。許してくれ」

「いや、あなたの懸念はもつともだ」

イルデさんからの謝罪を正面から受け止めたモリスさんは、さらに続ける。

「今はもう、我らの力を理解していただけたようだし」

「ああ——だから……ともに戦ってはくれないだろうか」

「もちろんだ。我々は仲間だからな」

「仲間、か。私は魔女だよ？」

「関係ないさ」

真っ先にそう告げたのはパウリーネさんだった。

「あなたがロミィナ様のために力を貸してくれているのは十分伝わっています」

「そう言ってもらえてよかったよ」

なんだか、イルデさん……張り詰めていた糸が切れたように脱力したな。

恐らくだけど、それくらい相手が厄介ということなのだろう。

何せ——相手はメインヒロインの一角かもしれないのだ。

とはいえ、現時点では俺は彼女の運命を悪い方向へねじ曲げるつもりなど毛頭ない。

まだ彼女は何もしていないし、第一、本当に敵かも分からないからな。

そもそも、ゲームにおいてアズベルはヒロインたちとは学園時代に絡みがまったくないから、現

時点での情報は皆無なのだ。

……待てよ。

ここをうまく利用できないだろうか。

例えば、原作主人公であるカルロと、俺たちはこの世界で友だちになることができた。

これは原作【ブレイブ・クエスト】にはない、この世界オリジナルの展開だ。言ってみれば、そこでひとつロミーナの運命を変えたってわけなんだ。

フラグは、些細な行動で折れたり変わったたりする。

それを考えれば、ミルクスとも良い関係を築くことは十分可能はず。

ロミーナの破滅フラグは今の彼女の状態を見る限り、よほど酷い事態でも起こらない限りはすぐには成立しないと考えるが……それでも油断はならない。

ミルクスとも良好な関係を構築するのが大事になってくるかもな。

あとは護衛の充実。

本当に厄介な敵が絡んできた際、魔法だけでは対処できない場面も出てくるだろう。

そんな時はモリスさんやパウリーネさんに頑張ってもらわなくちゃいけない。

不得意にしている魔法分野ではどうしても後れを取ってしまうが、その分、鍛え抜かれたフィジカルと騎士としての戦い方で渡り合う——不利そうに感じられるけど、あの人たちの場合はそれを軽く凌駕するポテンシャルがある。

きつと、イルデさんもそれを察したからふたりに謝り、万全を期すために改めて協力を要請したのだろう。

俺たちがこれからやろうとしていることは、ロミーナを守ること……だが、言い換えれば、この世界に根づく運命とも呼ぶべきフラグという圧倒的な力に立ち向かうって意味でもあるのだ。

生半可な力では太刀打ちできない。

ひとりひとりが力を出し切らないと。

「みんなで力を合わせれば、どんな奴が襲ってきたとしてもきつと大丈夫だよ」

締めくくるように言う、大人三人は静かに頷いた。

こうして、ロミーナを守る体制は着々と整いつつあった。

俺としても、異世界での学園生活をロミーナと一緒に心ゆくまで満喫したいからな。

そのためにも、やるべきことは山積みだ。

ロミーナの魔力制御補助を可能とするアイテムも作らなくちゃいけないしな。

◇◇◇

いつも通りに夕食を終え、自室へ戻つてくると、すぐに生産魔法の研究に取り組んだ。思い返してみると、これまでにいろんなアイテムや武器を作ってきたよな。

——って、なんかしみじみした言い方になってしまったな。これで最後というわけじゃないんだから、しっかりしないと。

気持ちを切り替え、俺はイルデさんから依頼のあった、魔力制御を補助できるアイテムを作ろうとしたのだが……ここで根本的な問題にぶち当たる。

「だあ、もう！ 小難しい考えは明日になってからだ！ 俺だけじゃ無理っぽいし、イルデさんにも協力をしてもらわないと！」

半ギレの状態でベッドへとダイブし、部屋の明かりを消す。

簡単にはできないって予感があった。

何より、自分自身にまったくビジョンが見えていないからだ。

「そもそも……魔力制御ってどうやるんだ？」

天井を眺めながら呟く。

俺も魔法は使うから頭の中には漠然としたイメージこそ浮かんでいるものの、もっと具体性がほしいところだ。

今まで作ったアイテムって、俺が前世の世界——つまり、現代日本で使われている道具の再現が多かった。

しかし、魔力制御となると、完全オリジナルのアイテムってことになる。

いや、もしかしたらすでに似たようなものが存在している可能性もあるんだよなあ……これは魔

法の専門家であるイルデさんに聞いた方が早そうだが、せっかく体験入学できるのだから、魔法を研究している人たちも大勢いるみたいだし、話を聞いてみたいな。

それに……ヒロインのひとりであるミルクス・エルディンとの接点も生まれ得る。

イルデさんは警戒している素振りもあったけど、原作でのミルクスは悪徳貴族や王族が相手であつても物怖じせず、自分のスタイルを貫いていくタイプだった。

そういう理由もあつて、個人的にはあまり敵とは思えないんだよな。

ちなみに、そういった自然体のキャラがファンには受けているようで、ヒロインの中でも人気上位だった。

多少、天然っぽい反応をする時があるけど、そこがちょっと抜けている感じがして彼女の魅力のひとつとなっている。

……いやでも、もしかしたら、カルロとのイベントも同時発生するだろうから、そちらの邪魔にはならないよう気をつけたいとな。

ロミーナ以外の点で、原作の流れを大きく変えるようなことはしないつもりでいる。

まだ数年先の話だが、いずれカルロやミルクスをはじめとするヒロインたちは、この世界を崩壊へと導く巨悪と戦わなくてはいけない。

つまり、ある程度本編の通りにカルロやヒロインたちが動いてくれないと、そもそもカルロと彼女たちが仲間にならない、なんて事態も想定できる。

それだけは絶対に避けなくてはいけないからな。

もつとも、ヒロインの中でもミルクスだけは少し毛色が違っていて、他のヒロインは全員、学生としてカルロと学園で会おうのだが、彼女だけは研究者として学園に在籍していた。

なので、他のヒロインに比べるとカルロと学園での接点が少ないんじゃないかと予想している。

それなら、ある程度は積極的に絡んでいけるだろう。

「……いいぞ。だんだん活路が見えてきたじゃないか」

魔力を制御するアイテムを生み出すのに苦戦していたが、ミルクス・エルディンとの接点をきっかけに突破口を見出せそうな気がしてきた。

体験入学に行ける日が待ち遠しくなってきたぞ。

第三章 つぎ、王立学園へ

体験入学の日が迫る中、俺たちは至って変わらぬ穏やかな日々を過ごしていた。

ガナス村の農作業を手伝い、それが終わったらそれぞれの鍛錬に移行。

ロミーナは氷魔法をさらに極めるべく、特訓にも熱が入っているようだ。ただ、魔力が尽きる寸前までやろうとするものだから、師匠であるイルデさんやパウリーネさんは心配でたまらない様子。

それが終わると、夕食までの時間はお互いの特訓内容を屋敷内で報告し合っていた。

俺はモリスさんから剣術を習っているんだけど、ロミーナの魔法特訓に対する熱量とはかなり差があるのを感じる。

というのも、俺の場合はもちろん剣の腕を高めたいて目標はあるが、同じくらい新しい生産魔法習得にも同時進行で取り組んでいたのだ。

しかし、こちらは剣術とは違って順調とは言えず、正直、手詰まり感がある。

最大の要因は――魔道具の完成形が想像できない点にあった。

イルデさんからのアドバイスを受け、独学でも魔法制御について学んだのだが……まだまだ完璧には程遠いクオリティだ。

さらに俺を悩ませているのは、ロミーナが秘めている底なしのポテンシャル。

実は、イルデさんから追加情報もたらされ、曰く、当初の見込みよりもロミーナの魔力量はさらに上昇していきそうなのだという。

最近になってロミーナが特訓に熱を入れているのも、本人がそのことに薄ら気づき、もともと自分を高めたいという気持ちがあるからだという。

そんなロミーナの気持ちは、よく分かるよ。

これまでなんとかして魔力を抑え込もうと努力を続けてきた。

その背景には誰も傷つけないという彼女の優しさがあり、実現に向けてひたむきに努力をす

る姿を何度も見てきたからこそ、少しずつだが着実に成果が出てきているのだ。

おかげで現在ではもう以前のような、突発的に発動して周りにいる人たちを巻き込んでしまうといった事態は起きないだろうとイルデさんは太鼓判を押す。

同時に、これまで守られ続けてきた彼女が、今度は自分を苦しめ続けてきた氷魔法を使い、逆に人々を助ける側に回れるかもしれない——この可能性が、彼女の心に火をつけたようだ。

とはいえ、完全に不安が払拭しきれたとは言いにくい状況でもあると、イルデさんは冷静に分析をしていた。

何かのきっかけで魔力が暴走してしまう事態も十分に想定できるという。

イルデさんの語る「きっかけ」というのが、恐らくロミーナの闇堕ちフラグ。世界を氷漬けにしようとする目論み、カルロたちと対峙する大悪党へ変貌を遂げる引き金だ。

最悪の事態を食い止めるためにも、俺自身のレベルアップも求められるな。

そしてついに——体験入学当日を迎えるのだった。



その日は朝から何かと騒がしかった。

体験入学は二泊三日の予定となっており、寝る場所は空いている寮の部屋を提供してくれるら

しい。

そのため、着替えや生活用品が必要になる。そいつがふたり分ともなれば、結構な荷物になるかな。事前にある程度は準備していたとはいえ、使用人たちは馬車の用意も合わせてバタバタと大忙しだ。

ちなみに、ここから学園までは相当遠いらしく、途中で一泊挟む予定になっている。

辺境領地って、自然豊かで穏やかな場所だけど、こういう時は凄く不便に感じるよ。

馬車の支度が整うまでの間、俺とロミーナは屋敷の中庭に出ると、お互いにしみみした雰囲気を出しつつ学園への思いを語った。

「学園までは想像以上に距離があるね」

「でも、普段は寮での生活になるから、移動自体は頻繁にするわけじゃないでしょ？」

「そりゃそうだ。でも、全寮制かぁ……ここへ帰ってくるのは年二回くらいになりそうなんだってさ」

「ガナス村の人たちに会えなくなっちゃうのは寂しいわね」

「ロミーナは全寮制で大丈夫？」

「アズベルがいてくれたら、どこでも平気よ。それに、護衛騎士のふたりもいてくれるし、入学となれば身のお世話をしてくれる使用人もついてきてくれるのでしょうか？」

「うん。そういう話だったね」

今回はまだ体験入学なのですぐに戻ってくるが、入学をしてからは学園で過ごす機会が圧倒的に多くなる。

そうなった場合、屋敷で働く使用人が数人同行し、いろいろとフォローしてくれるという。

俺はまだ中身が大人の状態だから平気だけど、ロミーナはまだ子どもだ。

ご両親や姉妹については……まあ、どう思っているのか、本音の部分は分かりにくいところもある。

けど、少なくとも俺たちの暮らす辺境領地で一緒に生活をするようになってから知り合った人たちと長期間にわたって会えなくなってしまうのは寂しいんじゃないかと心配していた。

それこそホームシックなんて事態にもなりかねないんじゃないか？

ただ、ロミーナ自身はそういった不安部分よりも、魔法についてより詳しく学べることに意欲を燃やしている。

「魔法の授業って、どんな感じなんだろう……」

期待に瞳をキラキラさせるロミーナ。

ちよつと前までは、まるで違った反応を見せていた。

やはり、氷魔法を完璧に制御しきれていないという不安もあつてか、「誰かを傷つけてしまったらどうしよう」という様子だったけど、イルデさんの太鼓判のおかげで自信がついたのだろう。

ただ、彼女の氷魔法の暴走については、貴族家の間ではある程度有名な話だったらしい。

一緒に学園で学ぶことになるだろうクラスメイトたちがその噂を知っていたら、今のロミーナがどれほど氷魔法を制御できているか完璧に把握しているわけじゃないだろうし、誤解されることもあるかもしれない。

最初のうちは何かと苦労することが多そうだな。

もちろん、俺は婚約者として彼女を全力で支えていくつもりでいる。

ロミーナが孤立をしてしまわないよう、しっかりとフォローしなくちゃな。

それにしても……原作に登場するアズベル・ウイドマーク（本物）は、一体何をやっていたんだろうな。

ロミーナ以上に出番がなく、そもそもボイスさえ未設定。おまけにゲーム内でのセリフも非常に少なく、キャラデータにおけるプロフィールは『ロミーナの婚約者』くらいしか書かれていないのだ。

プレイ当時はまったく関心がなかったから、特に何も感じなかったけど……自分がそのアズベルに転生してロミーナを救おうとしたら、あまりにも情報が少なすぎると憤りさえ覚える。

まあ、こればかりは開発スタッフを責めても仕方がない。

本編での出番がほんのわずかしかない端役の設定に注力した結果、肝心のメインキャラが練られていないとなつては本末転倒だからな。

それに、情報がないということは、つまりこれからいくらでも変更できる可能性があると同義。

そうやってポジティブに考えるとするか。

そんなことを思いながらしばらくロミーナと話し込んでいたら、父上が俺たちを呼びに来た。

「待たせたな、ふたりとも。ようやく馬車の準備ができたぞ」

「ありがとうございます、父上」

「では、私たちはそろそろ出発しますね」

「うむ。楽しんできたまえ」

うーむ……ロミーナと父上の会話も、随分と自然なものになったな。

ここへ来た当初はやはり緊張もあつてか、とてもぎこちない感じがしたけど、今では全然そういった素振りを見せず、ありのままに接しているように見える。

まあ、ロミーナの父親も一見では悪い人じゃなさそうだったけど、ふたりの姉の態度を見る限り、表に出していない部分で何かをやらかしている可能性はあるか。

ともかく、ロミーナが父上と仲良く話している姿は俺としても喜ばしい光景に映る。

前世でもよく聞いたからなあ……義実家との不仲って。

ましてやこっちは貴族っていう余計なフィルターがついているし。

でも、父上はイルデさんをロミーナの師匠にしたりと、ウイドマーク領に來た頃から彼女を気にかけてはいたよな。

向こうの家柄の高さも考慮してくるのだろうが、そういう打算的な思惑^{おもわく}だけでイルデさんと呼ん

だわけじゃないと思う。

原作ではセリフどころか登場すらしていない、アズベル・ウイドマークの両親。

どんな人物なのか振り返ってみると……前世の記憶を取り戻す前から振り返ってみても、ふたりの言動におかしな点は特に見られない。

俺とロミーナの婚約に政略的な狙いはあるものの、この世界ではそれが普通なので、批判^{ひはん}されるようなことじゃない。

むしろ、ロミーナの心を蝕^{むし}んでいた氷魔法を克服できるようにイルデさんを紹介したりと、優しい面の方が大きい。

両親がロミーナに対して温かく接してくれているおかげで、俺も自分のやるべきことに集中できる環境ができています。

これって地味に大きいよな。

そんなことを考えながら外に出てみると、想像を超える光景が広がっていた。

「ち、父上……馬車の数が多くないですか？」

敷地の外へとつながる門の近くに馬車がとまっているのだが、その数は全部で七台。

むしろこれほどの数の馬車をうちが保有していたことに驚きだ。

近くにはすでにモリスさん、パウリーネさん、そしてイルデさんの三人も出てきているが、みんな馬車の数に啞然としている。

「辺境領主のウイドマーク家にペンバートン家のご令嬢がやってきたのだ。恥をかかせるわけにはいかんからな」

なるほど。

そういう意図があったのか。

まあ、同じ貴族とはいえ、うちのウイドマーク家とロミーナのペンバートン家では格に大きな違いがある。

当初、ペンバートン家はうちなんて眼中になかっただろう。

ロミーナの婚約者には相応の家柄を求めたはずだが、氷魔法の件で他が敬遠けいえんしたこともあって、仕方なく話を持ってきたって感じがしていた。

父上としてはロミーナに恥をかかせないよう頑張ったんだろうけど、これはちよつとやりすぎな気がするけどなあ。

「さすがにこれは多すぎなんじゃないかな？」

「あ、あの、参考になるかどうかは分かりませんが、私のふたりの姉が入学した際の馬車の数は三台でした」

「なんと!？」

驚愕する父上。

ひとりで三台なら、俺たちふたりでも六台が妥当だとうになるな。

「むう……ならばもう少し台数を減らしても大丈夫そうか」

「大体、あんなにたくさん用意しても肝心の荷物が無いのでは？」

「ぐっ」

俺からのツッコミを受けて言葉に詰まる父上。

そもそも公爵家であるペンバートン家の姉妹が馬車を多く用意したのは、それだけたくさんの荷物を運ぶ必要があったからに他ならない。

そりゃあ、公爵家ともなればいろんなパーティーなんか引っぱりだこだろう。時には学園からそのまま会場入りをする時だってあるはず。

いちいち家に戻って支度をするのは面倒だから、学園内で用意ができるように準備を整えていくのは簡単に想像できる。

だから、荷物の数も増えて馬車もたくさん連れてきたのだろう。

でもうちの場合は……パーティーに呼ばれる機会なんてほとんどないからなあ。

ロミーナと正式に結婚すれば、公爵家のご令嬢とお近づきになりたいと招待される回数は増えるのかもしれないが、そこまで露骨ろこつに数が増えたりもしないだろうし。

つまり何が言いたいのかというと——うちの場合は馬車の数だけ多くて肝心の荷物が入っていないのもチラホラあるんじゃないのかって話だ。

どうやら図星だったようで、父上は使用人たちに馬車の数を調整するよう指示を出す。

そんな反応を見て、モリスさんとパウリーネさんは苦笑いを浮かべ、横に立つイルデさんは肩をすくめて「やれやれ」と呟いていた。

一方、ロミーナとしては父上の心遣いが嬉しかったらしく、「ありがとうございます」と感謝の言葉を送り、父上も「いやいやこれしき」と照れ笑いで返していた。

「最初は呆気にとられましたけど、ロミーナ様の安全を考慮した場合、これくらいの数で移動した方が得策なのかもしれませんね」

パウリーネさんはそう語るが……あんまり抑止力としての効果は期待できないんじゃないかな。

「君の意見も一理あるが、襲ってくる奴はそれなりに対策を練ってくるだろうから、馬車の数なんてあまり関係はないんじゃないかな」

俺が思っていることをそのままパウリーネさんに伝えたのはイルデさんだった。

「それはそうかもしれませんが……」

「仮に、ふたりを襲おうとする不屈き者がいるなら——私たちが始末をすればいいだけのこと」

「イルデ殿の言う通りだ。その方がシンプルで分かりやすい」

「っ！ 確かに……」

太い腕を組みながら、モリスさんは威厳溢れる低音ボイスでそう告げる。さらにパウリーネさんも彼の言葉にハツとなって不敵な笑みを浮かべている。

……本当に、この三人が味方でよかったよ。

「学園でも引き続き、この子たちを頼んだぞ」

「はっー」

「ご期待に沿えるよう頑張るよ」

ビシッと騎士らしい敬礼を決めるモリスさんとパウリーネさんに対し、イルデさんはなんとも彼女らしい脱力した返事を送る。

一見すると頼りなく映るが、彼女がどういう人間であるかをよく知っている俺たちからすれば、とても頼もしく見えるのだ。

その後、俺たちは馬車へと乗り込む。

ちなみに数は二台に減った。

だいぶ見栄を張っていたようだな。

俺とロミーナはともに窓へと張りつき、変わりゆく景色を眺めながらこれから始まる体験入学に胸を躍らせていた。

学園見学は二泊三日で行われる。

俺たち以外にも参加者がいるという話だったので、もしかしたら友だちができるかもってロミーナはウキウキしていた。

そこにはもう不安は一切感じられない。

イルデさんとの特訓が、彼女に自信をもたらしてくれたようだ。